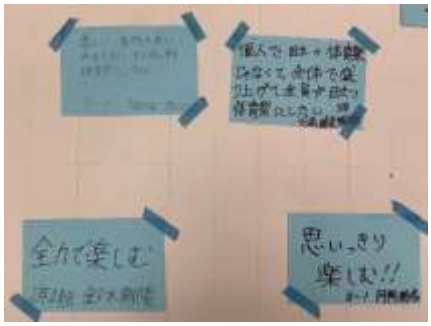
学校だより

いわむろの風

2021 年 9 月 22 日

【教育の指針】

グローカル・マインドを身に付け、
自立・自己実現に向かう生徒を育てる



今年の体育祭のミッションは、『全校生徒が「創る」。全校生徒が「楽しむ」。こと』

コロナ禍の制限の中で、何ができるか、どうすればできるかアイデアを集め、試行錯誤し、自分たちの手で見事にやり抜いた。

やり抜く力（GRIT:グリット）

校長　本多　豊

人生の成功を決めるものは何か。知能か才能か金か運か・・・？　心理学者が多くの研究から導き出した答えは、「やり抜く力」（GRIT:グリット）です。これはまったく新しい考えというよりも、この言葉でまとめた本が出され、メディアでも取り上げられ話題となったものです。

（『やり抜く力 GRIT（グリット）』:人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身に付ける』
ダイヤモンド社 2016 年）

若者たちがどのくらい頑張って走り続けられるか調べた実験があります。時間や距離自体ではなく、運動能力に応じて、どれほど頑張って走り続けられるかを調べました。その結果、走り続けられた人は、高齢になっても人生に満足感をもち、やりがいをもって過ごしていました。

幼児の我慢強さ（自己制御力）を調べた実験もあります。４歳児の目の前にマシュマロを一つ出して、「食べるのを少し我慢できたら、あとでマシュマロを二つあげる。」と言います。この実験でマシュマロを我慢できた子は、知能や親の財力の影響を超えて、大きくなっても学校の成績も良く、仕事も成功していました。

人生で成功をするためには才能と努力と幸運が必要でしょう。でも、この中で最も大切なのは努力です。そして、普通の成功を手に入れるために必要なのは、特殊な才能でも幸運でもなく、やり抜く力をもって努力できることです。持続力こそが、成功の秘訣なのです。

やり抜く力は、今日頑張る力ではなく、今日失敗しても明日またトライできる力です。挫折してもくじけず、くさらず、やる気をもち続けるのが、やり抜く力、グリットです。

そのために、子どもの頃のいわゆる「乗り越える体験」はとても重要で、勉強、部活動、行事、学級活動、生徒会活動など、日常の小さなことの積み重ねこそが有効であるとわかっています。やり抜く力は育てることができるのです。

努力を続けるためには、目標や目的が必要です。大会を目指したり、人の役に立ちたいと考えたりすることです。目標があれば、厳しい練習にも耐えられるでしょう。それでも、どんなことにも失敗はつきものです。その時に、希望があれば努力を続けられ、やり抜く力もさらに育っていくのです。希望とは、人間は努力しだいで人間的資質や知的能力を磨いて伸ばすことができる。そして運命は変えることができるのだという信念です。この「やれば、できる。」といつも信じている心のもちようを「グロース・マインドセット」と言います。

うまくいかない時こそ、あきらめず、グロース・マインドセットをもち、失敗や挫折を基にやり方を変えてトライし、自分を成長させていける「やり抜く力」をもった人材がますます求められる社会になっています。

教育活動の振り返り　　目指す資質・能力育成のための手立ての効果は

1　「目指す資質・能力」（『教育ビジョン』に示したもの）を育成するために授業をはじめとする教育活動において設定した手立て（方策）が、確実に実践されたか、効果はどのくらい見られたかを検証するために、全校生徒と職員を対象に意識調査を実施しました。　★結果は前ページ見開きの表を見てください。

（1）自己調整しながら様々な集団の中で協働できる自律性（主体性と社会性）についての質問①～⑩

（2）自尊感情とメタ認知力についての質問⑪～⑮

（3）授業改善についての質問⑯～㉒

2　調査結果から読み取れることと今後の方針

（1）自己調整しながら様々な集団の中で協働できる自律性（主体性と社会性）について

○【自己調整・協働】【傾聴】【やり抜く力】については、場や機会を工夫することによる成果が見える。

●【目的意識】【前に踏み出す力】【自己決定】【個性・能力の発揮】が課題である。教師はある程度の何らかの手立てをしていると考えているが、生徒の変容に十分つながっていない。

→夏休み中に実施した、QU を活用した生徒理解と学級経営の職員研修を基に、授業、学級活動等で改めて具体的な手立てを組織的に実施する。（学級力向上プロジェクトなど）

（2）自尊感情とメタ認知力について

○教師や仲間からの賞賛や支持が得られるような活動の場や仕掛けを充実させることにより、他者評価による自己肯定感、自己有用感が醸成されていることが見える。

●「自分にはよいところもよくないところもあると思っている。」と答えた生徒が多い反面、「自分は誰かの役に立てると思っている。」や「将来の夢や目標がある。」と答えた生徒の割合が低くなっており、教師が具体的な手立てをしているかどうかの低さと関連していると考えられる。

→誰かからの評価だけでなく、生徒が自ら自分の行動を振り返り、目標の達成や自分の成長を確かめ価値付ける。そしてさらにどうしたいのかどうなりたいのかを考え、決めさせる働き掛けを見直し、場や機会を充実させる。（教科授業での振り返りシートや学級活動でのキャリアノートなど）

（3）授業改善について

○生徒にとって「この時間で何をどのようにやるか。何ができるようになることがゴールかわかる。」取り組みやすい授業。みんなで考え納得し合える答えを導くような対話的な（協同的な）学習が組織的に取り組まれていることが見える。

→学習環境と指導方法の UD を引き続き徹底する。

●「自分の考えを筋道立てて相手に説明する。」「どういう根拠や理由でそう考えるのかに注意しながら人の考えを聞く。」「他の人の考えややり方を聞いた上で、自分の考えややり方を見直す。」論理的な思考力、判断力、表現力を身に付けることが課題である。

　これからの社会では、様々なルーツ、価値観、考え方をもつ多様な人が一緒に生活することが増えてくる。だから多様性を認め合うことが必要かつ大切なことになる。そのためにも、いちいち説明しなくても理解してもらえるだろうというこれまでの意識を脱却し、自分の考えは言わなければ伝わらないし、人の考えをしっかり聞かなければならないという意識と習慣を身に付けることが必須である。

→各教科で上記の目指す資質・能力を、各単元・題材に落とし込んで、単元・題材における深い学びの具体を評価規準として明確にする。さらに具体的な評価基準（ルーブリック）を明確にする。それを生徒と共有し、学習の見通しをもたせる。そして、学習のまとまりごとに、共有した評価基準を基に生徒自身が学習の過程を振り返る場を、単元構想にしっかり位置付け、その方法を工夫する。